



# ラクロスの現状と概略

公益社団法人日本ラクロス協会  
(2024年11月12日現在)



(C) Copyright Japan Lacrosse Association, All Rights Reserved.



Photo by H.Kaito



## 競技概要

ラクロスとは  
男子競技  
女子競技  
ラクロスの歴史

## 協会概要

沿革  
法人化背景  
理念・VISION・VALUES  
協会概要  
協会サイト

## 日本のラクロス市場

日本のラクロスの歴史  
日本の競技人口  
JLA加盟チーム数

## 資料

- 【資料1】 競技人口の推移 (JLA会員登録数)
- 【資料2】 競技人口内訳 (JLA会員登録数)
- 【資料3】 その他のラクロスコミュニティ (JLA非会員)
- 【資料4】 地区学生リーグ戦 歴代優勝チーム
- 【資料5】 地区クラブチームリーグ戦 歴代優勝チーム
- 【資料6】 全日本大学選手権大会 歴代優勝チーム
- 【資料7】 全日本クラブ選手権大会 歴代優勝チーム
- 【資料8】 全日本選手権大会 歴代優勝チーム
- 【資料9】 男子世界選手権大会の歴史
- 【資料10】 女子世界選手権大会の歴史
- 【資料11】 男子年代別世界選手権大会の歴史
- 【資料12】 女子年代別世界選手権大会の歴史
- 【資料13】 アジアパシフィック選手権大会の歴史
- 【資料14】 国際親善試合来日チーム
- 【資料15】 理念・VISION・VALUES

## 世界のラクロス市場

ワールドラクロス  
ワールドラクロス加盟国

## 国内大会概要

各地区リーグ戦  
全日本クラブ選手権大会  
全日本大学選手権大会  
全日本選手権大会

## 国際大会概要

世界選手権大会  
19歳以下世界選手権大会  
アジアパシフィック選手権大会  
ワールドゲームズ  
国際親善試合  
今後の世界大会予定

Photo by 日本ラクロス協会オフィシャルフォトグラファー・海藤秀満  
※写真の転載・無断使用禁止  
※ラクロス画像の貸与につきましては、アフロにてご案内しております





## ■ラクロスとは

フィールドサイズは、110m×60m（最小は92m×48m）。棒の先に網のついたアルミ製のスティック（クロス）を使い、直径約6cmの硬質ゴム製のボールを運び、約180cm四方のゴールに入れることで得点を競う10人对10人の団体球技。防具・スティックの規定、フィールド内ラインは、男女でルールが異なる。フィールドサイズ・試合時間も以前は男女でルールが異なっていたが、2019年より男女統一。

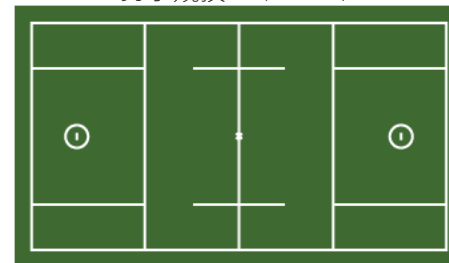
### 男子競技 ～地上最速の格闘球技～

上半身にヘルメット、ショルダーパッド、グローブなど防具を装着。ゴールキーパー（ゴールキーパー）を含め10人对10人、15分×4クォーター制で行われる。

#### <男子競技の魅力>

- ★時速150kmを越す強烈なシュート
- ★パワー・スピードを活かした華麗な個人技と緻密なフォーメーションプレー
- ★アルミニウム製のスティックによるチェックとハードなボディーアタック

男子競技フィールド



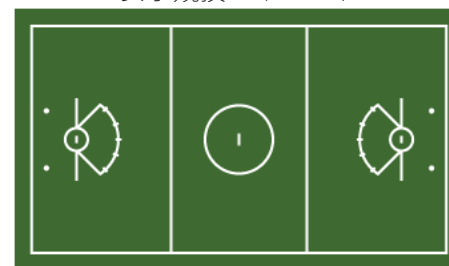
### 女子競技 ～華麗な本格派フィールド球技～

ゴールキーパー以外は防具をつけず、華やかなユニフォームとアイガードを着用。10人对10人、15分×4クォーター制で行われる。

#### <女子競技の魅力>

- ★10人のチームワークによる巧みなパスとフィールド全体を使った攻撃展開
- ★華やかなユニフォームと激しいプレーとのギャップ
- ★用具が少ないので、誰でも気軽に始められる

女子競技フィールド



## ■ラクロスの歴史

17世紀、北米の先住民が祭事や鍛錬のために行っていた同スポーツの原型をフランス系の移民が発見。先住民との交流を目的に、ルールを定めスポーツ化したものが始まりと言われている。使用していた道具が、僧侶が持つ杖（Crosse）に似ていたことから「La-Crosse」と呼ばれるようになった。100年近くアメリカ、カナダ、イングランド、オーストラリアのみで行われていたが、現在アメリカ・カナダを中心にオーストラリア・英国全土・チェコ・ドイツ・アルゼンチン・韓国など、日本を含め86の国と地域が国際競技連盟であるワールドラクロス（WORLD LACROSSE）に加盟し、世界的競技人口は約90万人になる。



## ■日本のラクロスの歴史

日本におけるラクロスの始まりは、1900年前後、北米からの伝道師・教師たちによるものであった。国内の大学へのラクロス導入の試みや、1960年代後半にはアパレルメーカー・ヴァンジャケット社 (VAN Jacket inc.) によるラクロスクラブ設立が行われたが、いずれも長く続くことはなかった。

1970年代初頭にはアメリカ女子チームが来日し、明治神宮外苑でエキシビジョンゲームを行ったが、日本にラクロスを根付かせるきっかけとはならなかった。

1984年に慶應義塾高校の学生が「Men's CLUB (1984年2月号)」に掲載されていた記事でラクロスを知り興味を持つ。1986年に慶應義塾大学の1年生となったその学生たちが、駐日アメリカ大使館に問い合わせ、ノリオ・エンドー氏 (JLA初代理事長) らの紹介を受けた。彼らの協力により、慶應義塾大学にラクロスチーム (男子) が誕生し、ノリオ・エンドー氏からスティック数本と基礎練習入門ビデオを受け取り、手探りで活動を開始。以降、友人・知人ルートで他大学の学生が集まりラクロスクリニックを開催し全国に普及した。

## ■日本の競技人口【資料1：競技人口の推移/資料2：競技人口内訳】

1987年の協会設立と同時に会員登録制度を開始。翌年の第1回関東学生リーグ戦の際には会員数は約250人となる。

その後、関東及び京阪神の大学生を中心に、口コミで爆発的に広がる。

また、ファッション誌や新聞などメディアで取り上げられ「おしゃれなスポーツ」として大学生の間で広まり、1994年には会員数1万人を超えた。

1997年の女子世界選手権大会の東京開催をきっかけに、国内での競技スポーツとしての地位も高まり、全国の大学数拡大も落ち着いた。この頃から、社会人クラブのチーム数・選手数が増加した。

1998年より、加盟大学チームと学生連盟が協力し、勧誘ノウハウの蓄積・共有をするための「大学新入生勧誘プロジェクト」を開始し、大学間の垣根を越えて協力しあう文化が根付いた。

2023年現在、競技人口 (協会登録) は男子競技約5,600人、女子約6,700人、合計約12,500人となり、近年は女子中高生や小学生 (ジュニアラクロス) にも愛好者は増えている。

## ■JLA加盟チーム

1988年に関東で日本学生ラクロス連盟が発足し、関東の大学男女11チームが加盟した。

1990年には日本学生ラクロス連盟西日本支部も発足、男女16チームが加盟。同年、日本社会人ラクロス連盟 (現・日本クラブチームラクロス連盟) も発足。

1991年には全国で男女約100チームが加盟し、以降、学生連盟は北海道、東北、東日本、東海、西日本、中四国、九州の全国7地区、クラブチーム連盟は北海道、東日本、東海、西日本、中四国、九州と6地区に広がり、現在は全国の約320チームがJLAに加盟している。



## ワールドラクロス加盟国 (92の国/地域)

- |            |             |
|------------|-------------|
| アルゼンチン     | マレーシア       |
| オーストラリア    | メキシコ        |
| オーストリア     | モザンビーク      |
| バルバドス      | オランダ        |
| ベルギー       | ニュージーランド    |
| バミューダ諸島    | ニカラグア       |
| ボツワナ       | ナイジェリア      |
| ブラジル       | ノルウェー       |
| ブルガリア      | パキスタン       |
| ブルキナファソ    | パナマ         |
| カンボジア      | ペルー         |
| カナダ        | フィリピン       |
| チリ         | ポーランド       |
| 中国         | ポルトガル       |
| チャイニーズタイペイ | プエルトリコ      |
| コロンビア      | カタール        |
| コスタリカ      | ペナン共和国      |
| クロアチア      | コートジボワール共和国 |
| チェコ共和国     | インドネシア共和国   |
| デンマーク      | マルタ共和国      |
| ドミニカ共和国    | ルワンダ共和国     |
| エクアドル      | シエラレオネ共和国   |
| イングランド     | トーゴ共和国      |
| エストニア      | ロシア         |
| フィンランド     | サウジアラビア     |
| フランス       | スコットランド     |
| ドイツ        | タイ          |
| ガーナ        | セルビア        |
| ギリシア       | シンガポール      |
| グアテマラ      | スロバキア       |
| ハイチ        | スロベニア       |
| ホーデノショーニー  | 南アフリカ       |
| 香港         | スペイン        |
| ハンガリー      | スウェーデン      |
| インド        | スイス         |
| イラン        | トルコ         |
| アイルランド     | ウガンダ        |
| イスラエル      | ウクライナ       |
| イタリア       | アメリカ合衆国     |
| ジャマイカ      | ウルグアイ       |
| 日本         | ウズベキスタン     |
| ケニア        | ベトナム        |
| 韓国         | バージン諸島      |
| ラトビア       | ウェールズ       |
| リトアニア      | ザンビア        |
| ルクセンブルク    | ジンバブエ       |
- (※アルファベット順)

## ■ワールドラクロス (WORLD LACROSSE) 国際競技連盟

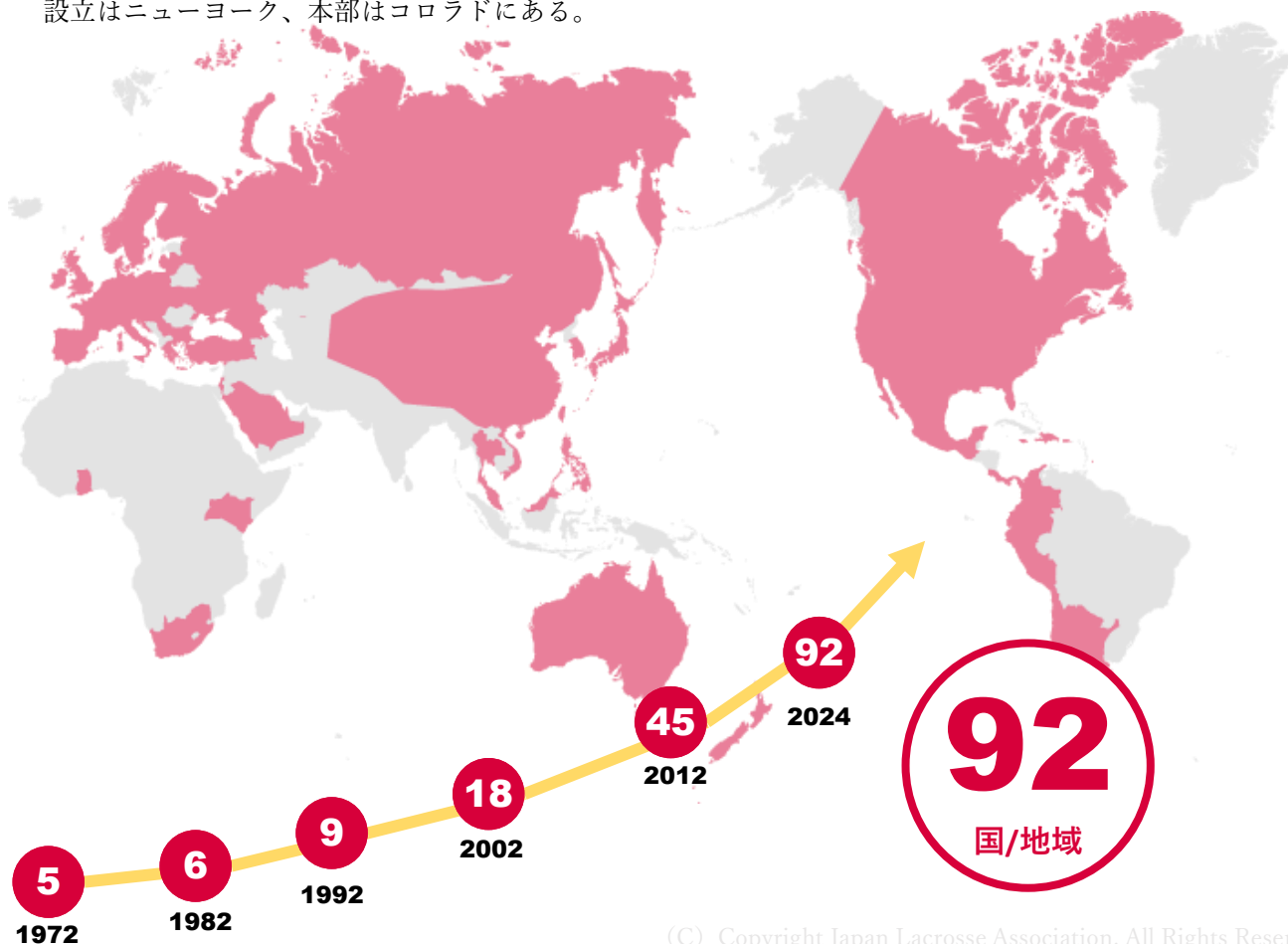
世界のラクロスを統括する国際競技連盟。

女子競技は、1972年にIFWLA (国際女子ラクロス協会/International Federation of Women's Lacrosse Associations) が設立され、女子ラクロスの世界普及と女子世界選手権などを主催。

一方、男子競技は、1974年にILF (国際ラクロス連盟/International Lacrosse Federation) が設立され、男子ラクロスの世界普及、男子世界選手権などを主催。これら男女の競技団体が、2008年にFIL (国際ラクロス連盟/Federation of International Lacrosse) として合併。

2018年11月、FILは東京でのIOC理事会で、IOC承認団体に暫定承認。2019年5月にはワールドラクロス (WORLD LACROSSE) と名称を変更。2021年にIOC正式承認された。

設立はニューヨーク、本部はコロラドにある。





## ■各地区リーグ戦（6月中旬～11月中旬／学生・社会人メインシーズン）

【資料4：各地区リーグ戦歴代優勝チーム/資料5：地区クラブチームリーグ戦歴代優勝チーム】

1988年、第1回学生ラクロスリーグ戦（現：関東学生ラクロスリーグ戦）を開催。参加校数は、男子5校・女子2校で、試合数は男子戦10試合・女子戦1試合であった。

1990年には、第1回関西学生ラクロスリーグ戦が開催され、以降、東海、九州、中四国、東北、北海道と全国7地区で学生リーグ戦が開催されている。

一方、社会人ラクロスは、1990年に日本社会人ラクロス連盟（現・日本クラブチームラクロス連盟）が発足。1991年に第1回クラブチーム東日本リーグ戦を開催。以降、関西、東海、中四国、九州、北海道と全国6地区でクラブチームリーグ戦が開催されている。

## ■全日本大学選手権大会（11月）【資料6：全日本大学選手権大会歴代優勝チーム】：

2009年に第1回全日本大学選手権大会が開催された。決勝戦の会場は、東京都世田谷区・駒沢オリンピック公園総合運動場陸上競技場。国内ラクロス大会では最大規模の試合である。優勝最多回数は、男子は早稲田大学、慶應義塾大学が共に5回、女子は慶應義塾大学、関西学院大学が共に3回。

## ■全日本クラブ選手権大会（12月）【資料7：全日本クラブ選手権大会歴代優勝チーム】

1999年に第1回全日本クラブ選手権大会が開催された。2011年の第13回大会までは、男女各4チームで東日本・西日本のリーグ戦優勝・準優勝チームが参加。以降、中四国、九州地区、東海地区からも参加し全国規模の大会となる。

近年、技術力の高い社会人クラブチームの試合が注目され、観客数が増えている。

## ■全日本選手権大会 A1（12月）【資料8：全日本選手権大会歴代優勝チーム】

1990年に第1回全日本選手権大会がラクロスの聖地・東京都江戸川区陸上競技場で開催された。第1回は大学生チームのみで行われ、第2回大会から社会人クラブチームが参戦した。

男子はFALCONSが2008年～2019年とFALCONSが12連覇で過去最多の優勝を果たしているが、2021年に22大会ぶりに学生・慶應義塾大学が優勝。女子は、1996年から2011年の16年間クラブチームが日本一を取り続けてきたが、2012年より慶應義塾大、明治大、関西学院大など学生の奮闘が目立つ。2021年の第31回大会は、クラブチームNeOが優勝し3連覇。







## ■ 世界選手権大会 (主催: WORLD LACROSSE)

### 男子世界選手権大会【資料9: 男子世界選手権大会の歴史】

最初の男子世界選手権大会は、1967年にカナダでラクロス誕生100周年を記念し開催された。4か国が招待され、アメリカが優勝。1974年には、オーストラリアラクロスの100周年を記念し2回目の開催。同年、国際ラクロス連盟 (ILF) が設立され、以降4年ごとの開催となる。日本は1990年にエキシビションで初参加、1994年より正式参加し、以降全大会に参加。男子日本代表は2018年に6位となり、メダルを狙える位置につけている。2023年6月21日～7月1日にアメリカ・カリフォルニア州サンディエゴで開催し、日本は30か国中5位の結果となった。2027年には、日本での初開催が確定している。

### 女子世界選手権大会【資料10: 女子世界選手権大会の歴史】

1972年に女子ラクロス協会の国際連盟 (IFWLA) が設立。1982年に最初の女子世界選手権大会がイギリス・ノッティンガムで開催された。1989年の第3回大会以降4年ごとの開催となり、1997年の第5回大会は日本・東京都江戸川区に大会招致。1986年と2005年を除く全大会でアメリカが優勝。日本は1993年より正式参加をし、以降全大会に参加。女子日本代表は近年Pool戦（ブロック戦）を毎回全勝で通過しており、上位を狙う位置につけている。2022年6月にアメリカ・メリーランド州タウンソンで開催され、日本は29か国中5位の成績を収めた。2026年には、日本での開催が確定している。



## ■ 年代別世界選手権大会 (主催: WORLD LACROSSE)

※2019年女子大会までは19歳以下大会で開催していたが、2020年の年次総会にて20歳以下の世界大会とすることが決定

### 男子年代別世界選手権大会【資料11: 男子年代別世界選手権大会の歴史】

1988年に19歳以下の世界大会として、第1回大会がアメリカ・ペンシルベニア州で開催され4ヶ国が参加。1996年の第3回大会は日本・東京都江戸川区に大会招致。日本は1992年より正式参加し、2012年、2016年は不参加。2020年大会より再参加予定であったが大会延期となり、2022年に21歳以下大会としてアイルランド・リムリックで開催し、23か国中5位の成績を収めた。

### 女子年代別世界選手権大会【資料12: 女子年代別世界選手権大会の歴史】

1995年に19歳以下の世界大会として、第1回大会がオーストラリア・アデレードで開催され7ヶ国が参加。日本は第1回大会より正式参加をし、以降全大会に参加。2019年大会は、カナダ・ピーターバラで開催され、22か国中5位の成績を収めた。2024年に香港で開催された20歳以下の大会で、日本は参加した20か国の中で3位に入り、銅メダルを獲得した。



## ■ アジアパシフィック選手権大会 (主催: APLU)

### 【資料13: アジアパシフィック選手権大会の歴史】

主催はアジアパシフィックラクロスユニオン (APLU)。オーストラリア、中国、香港、日本、韓国、ニュージーランド、チャイニーズタイペイ、タイが加盟。第1回大会は、日本・オーストラリアが中心となって準備を進め、2004年にオーストラリア・アデレードで開催。2005年の第2回大会は日本・大阪で開催され、以降2年ごとに開催。当初は男子競技のみの開催であったが、2009年第4回大会より女子競技も開催され、アジアパシフィック地域でのラクロスの発展を示す大会となった。日本は年代別日本代表や強化選手団が参加し、2011年第5回大会以降5大会連続で男女共に優勝をしている。2025年1月に開催予定の女子大会は、2026年の女子世界大会の予選を兼ねる大会となる。







## ■ ワールドゲームズ (主催: IWGA)

WORLD LACROSSEは、国際スポーツ団体連合 (GAISF)、及び、国際ワールドゲームズ協会 (IWGA) に加盟している。オリンピック実施種目は、実質的にワールドゲームズへの参画が前提になり、女子ラクロスは2017年ポーランド・ヴロツワフ大会より公開競技として参加し、日本女子代表も参戦。

2022年はアメリカ・アラバマ州で開催され、ラクロスは6人制ラクロス (SIXES) で女子競技は正式競技種目、男子競技は公開競技種目として実施。日本は、女子は8か国中6位、男子は8か国中3位と国際大会では初めてのメダル獲得をした。次回、2025年中国・成都大会では、女子が正式競技種目となる。

## ■ 国際親善試合 (主催: 日本ラクロス協会) (国内) 【資料14: 国際親善試合来日チーム】

第1回国際親善試合は1989年に、東京都世田谷区・駒沢オリンピック公園総合運動場陸上競技場で開催され、アメリカ NCAA1部で優勝したジョンス・ホプキンス大学男子チームとオーストラリア代表が来日し対戦した。エキシビジョンマッチとして、男女の「日本選抜 対 セントポール高」の試合を実施し、男子は3-11、女子は2-9で敗れた。

以降、オーストラリア、カナダ、イギリス、アメリカ、韓国、香港のチームが来日している。滞在期間中は、親善試合以外にも、フレンドリーマッチやホームステイ、観光を通しラクロス学生と多くの交流を設け、異なった文化や価値観に接することも目的としている。

## ■ 第34回オリンピック競技大会 ロサンゼルス大会

2023年10月16日、国際オリンピック委員会 (IOC) の総会にて、ラクロスは、2028年ロサンゼルスオリンピックの追加競技として正式に承認された。これにより、1908年のロンドンオリンピック以来、約120年ぶりにオリンピック競技として復活することとなる。なお、オリンピックにおけるラクロスの参加国数については、今後決定される予定。

## ■ 今後の世界大会予定 (2024年11月現在)

年月	大会名	開催地
2025年1月	【女子】 アジアパシフィック選手権大会 (世界選手権予選)	10人制 オーストラリア
2025年8月	【女子】 ワールドゲームズ	6人制 中国
2025年8月	【男子】 男子20歳以下世界選手権大会	10人制 韓国
2025年-2026年	【男子】 アジアパシフィック選手権大会 (世界選手権予選)	10人制 未定
2026年	【女子】 世界選手権大会	10人制 日本
2027年	【男子】 世界選手権大会	10人制 日本
2026年-2027年	【男女】 SIXES世界選手権大会	6人制 未定
2028年	【男女】 オリンピック競技大会 ロサンゼルス大会	6人制 アメリカ



## ■沿革

1987年6月に任意団体として日本ラクロス協会を設立し、2018年6月1日に一般社団として法人化。2020年11月に東京都中央区大伝馬町に事務所移転。2022年8月1日に、内閣総理大臣より公益社団法人として認定され「公益社団法人日本ラクロス協会」となる。

## ■法人化背景

法人化の目的は、民主的で明確なビジョンを掲げ、それを執行していく柔軟な組織に必要な安定的な財務基盤を作り、社会的な信頼を引き上げ、将来の日本ラクロス協会の成長戦略を描くこと。策定には、新日本監査法人EYや外部コンサルの助言も受けた。

ベンチャースポーツとして急成長してきた日本ラクロス協会は、今後も、内部管理体制を強化していくと共に、イノベティブでクリエイティブな本来のDNAを発揮しつつ、中長期のビジョン・経営計画の策定に着手していく予定。

## ■理念・VISION・VALUES【資料15：理念・VISION・VALUES】

2018年の法人化を機に、日本ラクロス協会役員・スタッフで議論を重ね、これまでラクロス文化を継承しつつ、更なる発展に向けて「理念・VISION・VALUES」を決定した。

## ■協会概要

名称：公益社団法人日本ラクロス協会 Japan Lacrosse Association（略称 JLA）

法人設立：2018年6月1日

公益認定：2022年8月1日

競技会員数：12,346名（2024年3月末ベース）

競技団体会員数（社員数）：258団体（2024年6月11日時点）

役員：理事15名 監事3名

職員：15名

事務所：東京本部事務所 〒103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町2-5石倉ビル1F TEL (03) 3666-2862

## ■協会サイト

JLA公式サイト：<https://www.lacrosse.gr.jp/>

ラクロスマガジンジャパン：<https://www.lacrossemagazinejapan.jp/>



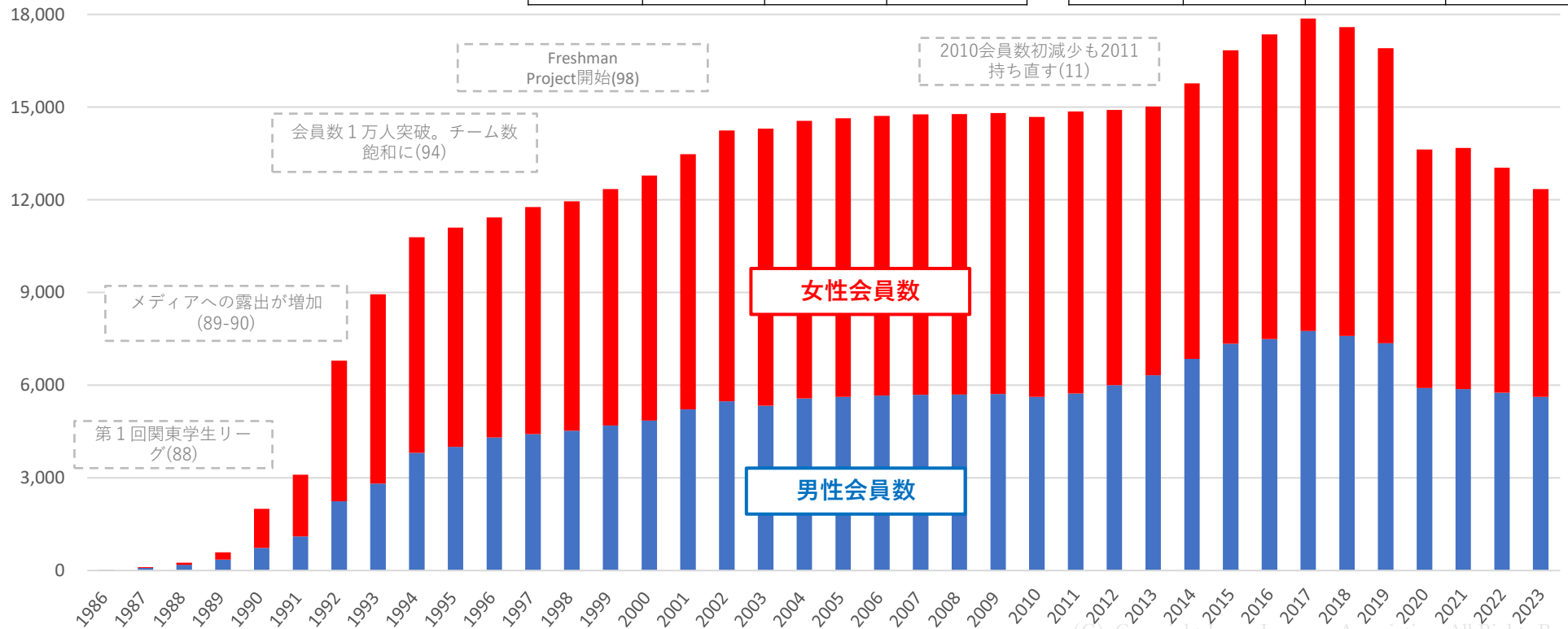
【資料1】競技人口の推移（JLA会員登録数）（2024年2月末現在）

[単位：人]

1986年	13	8	21
1987年	80	30	110
1988年	184	68	252
1989年	350	240	590
1990年	734	1,264	1,998
1991年	1,100	2,000	3,100
1992年	2,241	4,553	6,794
1993年	2,812	6,133	8,945
1994年	3,811	6,976	10,787
1995年	4,000	7,100	11,100
1996年	4,306	7,119	11,425
1997年	4,415	7,350	11,765

1998年	4,528	7,424	11,952
1999年	4,691	7,653	12,344
2000年	4,853	7,929	12,782
2001年	5,220	8,258	13,478
2002年	5,475	8,766	14,241
2003年	5,338	8,967	14,305
2004年	5,568	8,984	14,552
2005年	5,621	9,019	14,640
2006年	5,666	9,053	14,719
2007年	5,693	9,073	14,766
2008年	5,698	9,079	14,777
2009年	5,711	9,097	14,808
2010年	5,618	9,060	14,678

2011年	5,729	9,127	14,856
2012年	6,002	8,909	14,911
2013年	6,322	8,698	15,020
2014年	6,855	8,914	15,769
2015年	7,340	9,499	16,839
2016年	7,490	9,863	17,353
2017年	7,750	10,115	17,865
2018年	7,594	9,997	17,591
2019年	7,360	9,543	16,903
2020年	5,906	7,724	13,630
2021年	5,872	7,809	13,681
2022年	5,757	7,280	13,037
2023年	5,622	6,724	12,346





【資料2】 競技人口内訳（JLA会員登録数）（2024年2月末現在）

[単位：人]

競技		性別	全国	北海道	東北	関東	東海	関西	中四国	九州	その他
会員登録者総数〔重複登録者除く〕			12,346								
会員登録者総数			12,921	514	426	6,500	1,245	2,417	878	754	187
学生	男子競技	男性	4,405	170	205	2,146	383	920	334	247	
		女性	1,218	62	47	589	134	226	78	82	
		計	5,623	232	252	2,735	517	1,146	412	329	
	女子競技	男性	197	11	6	103	18	40	13	6	
		女性	4,751	165	162	2,413	484	899	315	313	
		計	4,948	176	168	2,516	502	939	328	319	
	男女競技計			10,571	408	420	5,251	1,019	2,085	740	648
クラブチーム	男子競技	男性	1,298	77	2	753	121	230	62	53	
		女性	137	3		86	13	18	13	4	
		計	1,435	80	2	839	134	248	75	57	
	女子競技	男性	14	0	0	11	1	2	0	0	
		女性	714	26	4	399	91	82	63	49	
		計	728	26	4	410	92	84	63	49	
	男女競技計			2,163	106	6	1,249	226	332	138	106

※チームスタッフは、掛け持ちで登録している場合、重複カウント

【資料3】 その他のラクロスコミュニティ（JLA非会員）

		競技者数	チーム数
中高生	男子競技	約300人	約10チーム
	女子競技	約1,200人	約50チーム
小学生（ジュニアラクロス）※イベント参加者延べ人数		約500人	30チーム
ラクロスOBG		約10万人	
JLA会員 父兄		約3万人	

## 【資料4】地区学生リーグ戦 歴代優勝チーム

年	北海道学生		東北学生		関東学生		東海学生		関西学生		中四国学生		九州学生								
	回	男子	女子	回	男子	女子	回	男子	女子	回	男子	女子	回	男子	女子						
1988 (S63)					1	慶應義塾	東京女子体育														
1989(H1)					2	慶應義塾	東京女子体育														
1990(H2)					3	東京	東京女子体育			1	関西学院	関西学院									
1991(H3)					4	慶應義塾	東京女子体育			2	関西学院	関西学院									
1992(H4)					5	早稲田	東京女子体育	1	愛知学院	南山	3	関西学院	関西学院	1	第一経済	西南学院					
1993(H5)					6	慶應義塾	東京女子体育	2	愛知学院	南山	4	関西学院	関西学院	1	山口	川崎医療福祉	2	第一経済	西南学院		
1994(H6)				1	東北	東北	7	慶應義塾	東京女子体育	3	愛知	愛知学院	5	神戸	関西学院	2	山口	川崎医療福祉	3	第一経済	福岡
1995(H7)	1	(実施せず)	北海学園	2	東北	東北学院	8	慶應義塾	東京女子体育	4	愛知	愛知学院	6	神戸	神戸松蔭女子学院	3	山口	川崎医療福祉	4	第一経済	福岡
1996(H8)	2	北海学園	北海学園	3	東北	東北学院	9	早稲田	学習院	5	愛知	金城学院	7	関西学院	甲南女子	4	岡山、愛媛 (両優勝)	川崎医療福祉	5	福岡	福岡
1997(H9)	3	北海学園	北海学園	4	東北	東北学院	10	早稲田	東京女子体育	6	名古屋	金城学院	8	関西学院	関西学院	5	島根	岡山	6	博多LC	F.EMPRESS
1998(H10)	4	北海学園	北星学園	5	仙台LC	東北	11	慶應義塾	東京女子体育	7	名城	南山	9	神戸	武庫川女子	6	岡山	川崎医療福祉	7	福岡	西南学院
1999(H11)	5	北海学園	北海学園	6	仙台LC	東北学院	12	慶應義塾	東京女子体育	8	名城	金城学院	10	神戸	甲南女子	7	岡山	川崎医療福祉	8	福岡	F.EMPRESS
2000(H12)	6	北海道	北海道	7	東北	東北学院	13	慶應義塾	日本女子体育	9	名城	金城学院	11	神戸	甲南女子	8	岡山	川崎医療福祉	9	西南学院	福岡
2001(H13)	7	北海道	北海道	8	東北	COUGARS	14	慶應義塾	日本女子体育	10	名城	南山	12	神戸	同志社	9	BARBARIAN LIGHTS	岡山	10	福岡	中村学園
2002(H14)	8	北海道	北海道浅井学園	9	仙台LC	東北	15	慶應義塾	日本女子体育	11	信州	南山	13	神戸	同志社	10	岡山	岡山	11	九州	F.EMPRESS
2003(H15)	9	北海道	北海道	10	東北	COUGARS	16	慶應義塾	日本女子体育	12	信州	南山	14	関西学院	武庫川女子	11	BARBARIAN LIGHTS	岡山	12	フクロソバブリック	福岡
2004(H16)	10	北海道	北海道浅井学園	11	新潟	COUGARS	17	慶應義塾	東京女子体育	13	南山	南山	15	京都	武庫川女子	12	岡山	岡山	13	西南学院	福岡
2005(H17)	11	北海道	北海道浅井学園	12	仙台LC	COUGARS	18	東京	日本女子体育	14	南山	中京女子	16	京都産業	武庫川女子	13	島根	岡山	14	九州	福岡
2006(H18)	12	北海道	北海道浅井学園	13	東北	東北	19	慶應義塾	立教	15	名城	中京女子	17	京都	同志社	14	岡山	川崎医療福祉	15	九州	九州
2007(H19)	13	SPACE TRAVELERS	北翔 (※3)	14	仙台LC	東北	20	日本体育	日本体育	16	名城	南山	18	関西学院	同志社	15	岡山	CURIOUS	16	西南学院	西南学院
2008(H20)	14	SPACE TRAVELERS	Sfida	15	仙台LC	宮城学院女子	21	慶應義塾	東京女子体育	17	日本福祉	名古屋	19	京都	大阪国際	16	BARBARIAN LIGHTS	愛媛	17	九州	福岡
2009(H21)	15	北海道	北海道	16	仙台LC	東北	22	一橋	東海	18	名城	南山	20	関西学院	大阪国際	17	岡山	CURIOUS	18	西南学院	福岡
2010(H22)	16	北海道	北海学園	17	新潟	COUGARS	23	早稲田	日本体育	19	名城	南山	21	京都	同志社	18	岡山	川崎医療福祉	19	infinity	西南学院
2011(H23)	17	北海道	北海学園	18	新潟	宮城学院女子	24	早稲田	立教	20	名古屋	金城学院	22	京都	関西学院	19	岡山 FERVIENTE (両優勝)	岡山 CURIOUS (両優勝)	20	西南学院	西南学院
2012(H24)	18	北海道	北海学園	19	岩手	東北	25	慶應義塾	慶應義塾	21	名古屋	金城学院	23	京都	同志社	20	岡山	愛媛	21	西南学院	福岡
2013(H25)	19	北海道	北海道	20	東北	宮城学院女子	26	早稲田	慶應義塾	22	名城	南山	24	神戸	関西学院	21	岡山	愛媛	22	九州	福岡
2014(H26)	20	北海学園	北海道	21	東北	宮城学院女子	27	慶應義塾	明治	23	名古屋	愛知教育	25	関西学院	関西学院	22	徳島	岡山	23	九州	西南学院
2015(H27)	21	北海道	北翔	22	東北	東北	28	日本体育	明治	24	南山	南山	26	大阪	関西学院	23	岡山	岡山	24	九州	福岡
2016(H28)	22	北海道	北翔	23	東北	東北	29	慶應義塾	明治	25	名古屋	愛知教育	27	神戸	関西学院	24	岡山	岡山	25	九州	西南学院
2017(H29)	23	北海道	北海道	24	東北	東北	30	慶應義塾	慶應義塾	26	南山	南山	28	大阪	同志社	25	岡山	岡山	26	九州	福岡
2018(H30)	24	北海道	北海道	25	東北	東北	31	早稲田	慶應義塾	27	名古屋	愛知学院	29	京都	関西学院	26	岡山	岡山	27	九州	福岡
2019(R1)	25	北海道	北海道	26	東北	宮城学院女子	32	早稲田	立教	28	南山	南山	30	関西学院	同志社	27	徳島	愛媛	28	九州	福岡
2020(R2)	新型コロナウイルス感染症感染対策のため、リーグ戦は実施せず/特別大会を開催																				
2021(R3)	26	北海道	北海道	27	東北	東北	33	慶應義塾	日本体育	29	名古屋	南山	31	関西学院	同志社	28	岡山	岡山	29	九州	福岡
2022(R4)	27	北海道	北海道	28	東北	東北	34	慶應義塾	慶應義塾	30	名古屋	南山	32	京都	関西学院	29	広島	岡山	30	九州	福岡
2023(R5)	28	北海学園	北海道	29	東北	東北	35	日本体育	日本体育	31	南山	南山	33	神戸	関西学院	30	広島	広島	31	九州	福岡
2024(R6)	29	北海道	北海道	30	東北	東北	36	慶應義塾	早稲田	32	名城	南山	34	神戸	関西学院	31	岡山	岡山	32	九州	福岡

※北翔大学：2007年に、北海道浅井学園大学から校名変更





【資料6】全日本大学選手権大会 歴代優勝チーム

大会回数	男子	女子
第1回 (2009年)	一橋大学	東海大学
第2回 (2010年)	早稲田大学	日本体育大学
第3回 (2011年)	早稲田大学	関西学院大学
第4回 (2012年)	慶應義塾大学	慶應義塾大学
第5回 (2013年)	早稲田大学	慶應義塾大学

大会回数	男子	女子
第6回 (2014年)	慶應義塾大学	明治大学
第7回 (2015年)	日本体育大学	明治大学
第8回 (2016年)	慶應義塾大学	関西学院大学
第9回 (2017年)	慶應義塾大学	慶應義塾大学
第10回 (2018年)	早稲田大学	関西学院大学

大会回数	男子	女子
第11回 (2019年)	早稲田大学	立教大学
2020年：新型コロナウイルス感染症の感染対策のため実施せず		
第12回 (2021年)	慶應義塾大学	日本体育大学
第13回 (2022年)	慶應義塾大学	慶應義塾大学
第14回 (2023年)	日本体育大学	日本体育大学

【資料7】全日本クラブ選手権大会 歴代優勝チーム

大会回数	男子	女子
第1回 (1999年)	ADVANCE	WISTERIA
第2回 (2000年)	VALENTIA	MISTRAL
第3回 (2001年)	VALENTIA	WISTERIA
第4回 (2002年)	VALENTIA	WISTERIA
第5回 (2003年)	DESAFIO	Sibylla
第6回 (2004年)	VALENTIA	MISTRAL
第7回 (2005年)	DESAFIO	WISTERIA
第8回 (2006年)	VALENTIA	MISTRAL

大会回数	男子	女子
第9回 (2007年)	VALENTIA	MISTRAL
第10回 (2008年)	FALCONS	FUSION
第11回 (2009年)	VALENTIA	Sibylla
第12回 (2010年)	VALENTIA	MISTRAL
第13回 (2011年)	FALCONS	FUSION
第14回 (2012年)	FALCONS	MISTRAL
第15回 (2013年)	FALCONS	MISTRAL
第16回 (2014年)	FALCONS	NLC SCHERZO

大会回数	男子	女子
第17回 (2015年)	FALCONS	FUSION
第18回 (2016年)	FALCONS	NeO
第19回 (2017年)	FALCONS	NeO
第20回 (2018年)	FALCONS	NeO
第21回 (2019年)	FALCONS	NeO
2020年：新型コロナウイルス感染症の感染対策のため実施せず		
第22回 (2021年)	Stealers	NeO
第23回 (2022年)	FALCONS	MISTRAL
第24回 (2023年)	GRIZZLIES	NeO

【資料8】全日本選手権大会 歴代優勝チーム

大会回数	男子	女子
第1回 (1990年)	青山学院大学	東京女子体育大学
第2回 (1991年)	慶應義塾大学	関西学院大学
第3回 (1992年)	早稲田大学	東京女子体育大学
第4回 (1993年)	慶應義塾大学	関西学院大学
第5回 (1994年)	慶應義塾大学	関西学院大学
第6回 (1995年)	慶應義塾大学	東京女子体育大学
第7回 (1996年)	ADVANCE-HANGLOOSE	WISTERIA
第8回 (1997年)	早稲田大学	WISTERIA
第9回 (1998年)	慶應義塾大学	WISTERIA
第10回 (1999年)	VALENTIA	WISTERIA
第11回 (2000年)	VALENTIA	WISTERIA

大会回数	男子	女子
第12回 (2001年)	VALENTIA	WISTERIA
第13回 (2002年)	VALENTIA	WISTERIA
第14回 (2003年)	DESAFIO	Sibylla
第15回 (2004年)	VALENTIA	WISTERIA
第16回 (2005年)	DESAFIO	CHEL
第17回 (2006年)	VALENTIA	MISTRAL
第18回 (2007年)	VALENTIA	MISTRAL
第19回 (2008年)	FALCONS	FUSION
第20回 (2009年)	FALCONS	Sibylla
第21回 (2010年)	FALCONS	Sibylla
第22回 (2011年)	FALCONS	NLCSCHERZO

大会回数	男子	女子
第23回 (2012年)	FALCONS	慶應義塾大学
第24回 (2013年)	FALCONS	MISTRAL
第25回 (2014年)	FALCONS	明治大学
第26回 (2015年)	FALCONS	明治大学
第27回 (2016年)	FALCONS	関西学院大学
第28回 (2017年)	FALCONS	慶應義塾大学
第29回 (2018年)	FALCONS	NeO
第30回 (2019年)	FALCONS	NeO
2020年：新型コロナウイルス感染症の感染対策のため実施せず		
第31回 (2021年)	慶應義塾大学	NeO
第32回 (2022年)	FALCONS	MISTRAL
第33回 (2023年)	GRIZZLIES	NeO



## 【資料9】男子世界選手権大会の歴史

回	年	主催	開催地	参加国/地域	1位	2位	3位	日本順位
第1回	1967年	ILF	カナダ・トロント	4	アメリカ	オーストラリア	カナダ	未参加
第2回	1974年	ILF	オーストラリア・メルボルン	4	アメリカ	イングランド	カナダ	未参加
第3回	1978年	ILF	イギリス・ストックポート	4	カナダ	アメリカ	オーストラリア	未参加
第4回	1982年	ILF	アメリカ・ボルチモア	4	アメリカ	オーストラリア	カナダ	未参加
第5回	1986年	ILF	カナダ・トロント	4	アメリカ	カナダ	オーストラリア	未参加
第6回	1990年	ILF	オーストラリア・パース	5	アメリカ	カナダ	オーストラリア	エキシビション
第7回	1994年	ILF	イングランド・マンチェスター	6	アメリカ	オーストラリア	カナダ	6位
第8回	1998年	ILF	アメリカ・ボルチモア	11	アメリカ	カナダ	オーストラリア	8位
第9回	2002年	ILF	オーストラリア・パース	15	アメリカ	カナダ	オーストラリア	5位
第10回	2006年	ILF	カナダ・ロンドン	21	カナダ	アメリカ	オーストラリア	6位
第11回	2010年	FIL	イングランド・マンチェスター	29	アメリカ	カナダ	オーストラリア	4位
第12回	2014年	FIL	アメリカ・デンバー	38	カナダ	アメリカ	イラコイ	8位
第13回	2018年	FIL	イスラエル・ネタニヤ	46	アメリカ	カナダ	イラコイ	6位
第14回	2023年	WL	アメリカ・サンディエゴ	30	アメリカ	カナダ	ホーデノショーニー	5位

※ILF：International Lacrosse Federation（国際ラクロス連盟） ※FIL：Federation of International Lacrosse（2008年にILFと合併）※WL：ILFは、2019年にWORLD LACROSSEに改称  
 ※第14回大会は、新型コロナウイルス感染症の影響により2023年に開催 ※ホーデノショーニー：従来フランス語の「イラコイ(Iroquois)」という名称で知られていましたが、2022年5月より名称を自らの国の言葉である「ホーデノショーニー」に正式に変更

## 【資料10】女子世界選手権大会の歴史

回	年	主催	開催地	参加国/地域	1位	2位	3位	日本順位
第1回	1982年	IFWLA	イギリス・ノッティンガム	6	アメリカ	オーストラリア	カナダ	未参加
第2回	1986年	IFWLA	アメリカ・フィラデルフィア	6	オーストラリア	アメリカ	スコットランド	未参加
第3回	1989年	IFWLA	オーストラリア・パース	6	アメリカ	イングランド	オーストラリア	未参加
第4回	1993年	IFWLA	スコットランド・エジンバラ	8	アメリカ	イングランド	オーストラリア	7位
第5回	1997年	IFWLA	日本・東京	7	アメリカ	オーストラリア	イングランド	7位
第6回	2001年	IFWLA	イングランド・ウィコム	8	アメリカ	オーストラリア	イングランド	7位
第7回	2005年	IFWLA	アメリカ・アナポリス	10	オーストラリア	アメリカ	イングランド	5位
第8回	2009年	FIL	チェコ・プラハ	16	アメリカ	オーストラリア	カナダ	7位
第9回	2013年	FIL	カナダ・オシャワ	19	アメリカ	カナダ	オーストラリア	9位
第10回	2017年	FIL	イングランド・ギルフォード	25	アメリカ	カナダ	イングランド	9位
第11回	2022年	WL	アメリカ・メリーランド	29	アメリカ	カナダ	イングランド	5位

※IFWLA：International Federation of Women's Lacrosse Associations（国際女子ラクロス連盟）※FIL：Federation of International Lacrosse（2008年にILFと合併）

（C）※WL：ILFは、2019年にWORLD LACROSSEに改称 ※第11回大会は、新型コロナウイルス感染症の影響により2022年に開催

## 【資料11】男子年代別世界選手権大会の歴史

回	年	主催	年代	開催地	参加国/地域	1位	2位	3位	日本順位
第1回	1988年	ILF	19歳以下	オーストラリア・アデレード	4	アメリカ	カナダ	オーストラリア	未参加
第2回	1992年	ILF	19歳以下	アメリカ・ロングアイランド	6	アメリカ	オーストラリア	カナダ	6位
第3回	1996年	ILF	19歳以下	日本・東京	5	アメリカ	オーストラリア	カナダ	5位
第4回	1999年	ILF	19歳以下	オーストラリア・アデレード	6	アメリカ	カナダ	イラコイ	6位
第5回	2003年	ILF	19歳以下	アメリカ・ボルチモア	9	アメリカ	カナダ	オーストラリア	6位
第6回	2008年	ILF	19歳以下	カナダ・コキットラム	12	アメリカ	カナダ	イラコイ	7位
第7回	2012年	FIL	19歳以下	フィンランド・トゥルク	12	アメリカ	カナダ	イラコイ	不参加
第8回	2016年	FIL	19歳以下	カナダ・コキットラム	14	アメリカ	カナダ	イラコイ	不参加
第9回	2022年	WL	21歳以下	アイルランド・リムリック	23	アメリカ	カナダ	ホーデノショーニー	5位

※ILF：International Lacrosse Federation（国際ラクロス連盟） ※FIL：Federation of International Lacrosse（2008年にILFとIFWLAが合併）※WL：WORLD LACROSSE  
 ※ホーデノショーニー：従来フランス語の「イラコイ(Iroquois)」という名称で知られていましたが、2022年5月より名称を自らの国の言葉である「ホーデノショーニー」に正式に変更 ※2019年女子大会までは19歳以下大会で開催していたが、2020年の年次総会にて20歳以下の世界大会とすることが決定 ※2019年女子大会までは19歳以下大会で開催していたが、2020年の年次総会にて20歳以下の世界大会とすることが決定 ※第9回大会は、新型コロナウイルス感染症の影響により2022年に21歳以下大会として開催

## 【資料12】女子年代別世界選手権大会の歴史

回	年	主催	年代	開催地	参加国/地域	1位	2位	3位	日本順位
第1回	1995年	IFWLA	19歳以下	アメリカ・フィラデルフィア	7	オーストラリア	アメリカ	イングランド	7位
第2回	1999年	IFWLA	19歳以下	オーストラリア・パース	7	アメリカ	オーストラリア	カナダ	6位
第3回	2003年	IFWLA	19歳以下	アメリカ・ボルチモア	7	アメリカ	オーストラリア	カナダ	5位
第4回	2007年	IFWLA	19歳以下	カナダ・ピーターボロー	11	アメリカ	オーストラリア	イングランド	5位
第5回	2011年	FIL	19歳以下	ドイツ・ハノーバー	12	アメリカ	オーストラリア	カナダ	7位
第6回	2015年	FIL	19歳以下	スコットランド・エディンバラ	14	カナダ	アメリカ	イングランド	6位
第7回	2019年	WL	19歳以下	カナダ・ピーターボロー	22	アメリカ	カナダ	オーストラリア	5位
第8回	2024年	WL	20歳以下	香港	20	アメリカ	カナダ	日本	3位

※IFWLA：International Federation of Women's Lacrosse Associations（国際女子ラクロス連盟）※FIL：Federation of International Lacrosse（2008年にILFと合併） ※WL：WORLD LACROSSE ※2019年女子大会までは19歳以下大会で開催していたが、2020年の年次総会にて20歳以下の世界大会とすることが決定



## 【資料13】APLU アジアパシフィック選手権大会の歴史

回	年	開催地	男子大会		
			参加国数	優勝国	日本順位
第1回	2004年	オーストラリア・アデレード		オーストラリアU23	3位
第2回	2005年	日本・大阪	5カ国 (6チーム)	USA west	4位
第3回	2007年	ニュージーランド・オークランド	4カ国	オーストラリアU21	2位
第4回	2009年	韓国・水原	5カ国 (6チーム)	USA west	2位
第5回	2011年	ニュージーランド・オークランド	6カ国	日本U22	優勝
第6回	2013年	中国・北京	8カ国	日本U22	優勝
第7回	2015年	タイ・バンコク	8カ国	日本U22	優勝
第8回	2017年	韓国・西帰浦市	6カ国	日本U22	優勝
第9回	2019年	韓国・慶州市	6カ国	全国強化指定選手団	優勝

女子大会		
参加国数	日本順位	優勝国
未開催		
未開催		
未開催		
3カ国 (5チーム)	日本U21	優勝
6カ国	日本U22	優勝
6カ国	日本U22	優勝
6カ国	日本U22	優勝
5カ国 (6チーム)	日本U22	優勝
6カ国	全国強化指定選手団	優勝

※第10回大会（2021年）は、新型コロナウイルス感染症の影響により実施せず

## 【資料14】国際親善試合来日チーム

年	回	男子		女子		年	回	男子		女子	
		国	チーム	国	チーム			国	チーム	国	チーム
1989年	第1回	アメリカ	Johns Hopkins大学	アメリカ	St.Paul's School	2003年	第15回	オーストラリア	U19オーストラリア代表	-	
		アメリカ	St.Paul's School 1			2004年	第16回	アメリカ	Princeton大学	アメリカ	西海岸大学選抜
		オーストラリア	Australia代表					アメリカ	西海岸大学選抜		
1990年	第2回	アメリカ	St.Paul's School	アメリカ	BALTIMORE GIRL'S TEAM	2005年	第17回	アメリカ	メリーランド大学 ポルティモア校	アメリカ	東海岸大学選抜
1991年	第3回	オーストラリア	U19Australia代表	アメリカ	STARS & STRIPES	2006年	第18回	アメリカ	North Carolina大学	アメリカ	MAACリーグ大学選抜
				カナダ	SOUTHFRAZERFIELD LACROSSE CLUB	2007年	第19回	アメリカ	California大学 Berkeley校	アメリカ	Maryland大学 Baltimore校
1992年	第4回	アメリカ	Kean College	アメリカ	Welsh National Squad					アメリカ	カリフォルニア選抜
1993年	第5回	アメリカ	P.T.P.S.ALL STARS	-		2008年	第20回	韓国	韓国選抜	アメリカ	U23カリフォルニア選抜
1994年	第6回	アメリカ	Bucknell大学	イギリス	England			アメリカ	U23カリフォルニア選抜		
1995年	第7回	-		アメリカ	AMERICAN EAGLES	2009年	第21回	アメリカ	Maryland大学 Baltimore校	-	
		-		アメリカ	STARS & STRIPES			アメリカ	USA WEST		
1996年	第8回	アメリカ	S.D.C COACHES	アメリカ	S.D.C COACHES	2010年	第22回	アメリカ	Notre Dame大学	アメリカ	Loyola大学
					ALL MARYLAND HIGH SCHOOL				USA Starz	アメリカ	West Coast Force
1997年	第9回	-		スコットランド	Scotland FETTES COLLEGE	2012年	第23回	アメリカ	Hofstra大学	アメリカ	USA Starz
1998年	第10回	アメリカ	USA選抜	オーストラリア	U19 Australia					アメリカ	West Coast Force
1999年	第11回	アメリカ	Wesley大学	アメリカ	Yale大学	2013年	第24回	アメリカ	Maryland大学 Baltimore校	アメリカ	Boston大学
2000年	第12回	アメリカ	Western States Team	アメリカ	George Mason University			オーストラリア	23歳以下代表	オーストラリア	23歳以下代表
				アメリカ	Western States Team	2014年	第25回	アメリカ	Drexel大学	アメリカ	Stanford大学
2001年	第13回	オーストラリア	U20選抜チーム	-		2015年	第26回	オーストラリア	23歳以下選抜	オーストラリア	23歳以下代表
		アメリカ(沖縄)	Okinawa-Marines			2016年	第27回	アメリカ	Hofstra大学	アメリカ	Winthrop大学
2002年	第14回	アメリカ	Johns Hopkins大学	-		2017年	第28回	-		アメリカ	Boston大学
		アメリカ	西海岸選抜			2018年	第29回	イングランド	23歳以下代表	イングランド	23歳以下代表
		アメリカ(沖縄)	Okinawa-Marines			2019年	第30回	オーストラリア	23歳以下代表	-	

※日本代表等との対戦を行う国際親善試合のみを掲載

※本表記載チーム以外にも、北海道・東北・東海・関西・中四国・九州の各地区で、各地区の選抜チームと外国チームが戦う国際親善試合を開催している

※2020年・2021年は、新型コロナウイルス感染症の影響により実施せず



## 理念 私たちは開拓者だ。

ラクロスの未知なる可能性を信じ、感動と興奮をみんなのもとへと広げていこう。

日本のラクロスは、まだ知られていなかったこのスポーツを、一人ひとりが自らの手でつくりあげ、広めてきたことからはじまりました。そのDNAは、今もたしかに私たちに受け継がれています。JLAは、ラクロス・プライドを胸に、未知なる可能性を信じ、ラクロスの感動と興奮を一人でも多くの人へと広めていく存在でありたいと思います。

## VISION 枠を超えてゆく。

常識にとらわれず、挑戦を繰り返して、もっと自由に楽しめるラクロスをつくりだす。

ラクロスは、競技の誕生以来、常に進化を続けてきたスポーツです。私たちは、現在のラクロスが完成形であるとは考えていません。こうあるべきという古い常識にとらわれず、一人ひとりが未来目線で、新しいラクロスをつくりだすことに情熱を注ぎたいと思います。変わらぬ伝統を守りつつ、今ある枠を超え、もっと誰もが自由に楽しめるラクロスへと進化させていく。それこそが、私たちの目指す姿です。

## VALUES

### #1 自分から動く。それが楽しい。

JLAは、まだ歴史の浅い若い組織です。一人ひとりが独立した精神をもち、主体的に頭を動かし、好奇心と遊び心をもって行動にうつしていきます。

### #2 誠実な人間であれ。

私たちは、社会の一員としての誠実さを持ち続けます。それを仲間と確認しあい、お互いを高めあっていきます。

### #3 日本が誇れるラクロス・メンバーを輩出しよう。

世界レベルの選手、指導者、審判、運営従事者を有する日本ラクロス界であるべく、さまざまな支援を行っていきます。競技力・技術力だけではなく、人間力の向上も重んじます。

### #4 LACROSSE MAKES FRIENDS.

ラクロスをプレーすることで生まれる、特別な絆があります。日本中、そして世界中の仲間たちと交流し、友情を育む機会をつくっていきます。

### #5 異なる個性があつまって、志をひとつに運営する。

私たちは多様性こそが組織を強く、豊かにすると考えます。JLAは、ボランティアとプロフェッショナルが、個々の能力を伸び伸びと発揮し、一体となって協力しあうコミュニティでありたいと考えます。

### #6 上下はないね、等しく仲間。

JLAでは、一人ひとりに役割の違いはあっても、心の上下関係はありません。草の根活動によって広まった日本ラクロスにおいては、年齢も立場も関係なく、みんなが等しく大切な仲間です。

### #7 ただラクロスを愛している！

ラクロスへの単純で純粋な気持ちで、みんなたしかにつながっている。だからこそ力を合わせれば、どんな未来もつくっていけると考えます。